





袖珍抄百韻之部卷四

古終舍黙池輯



表題



晋伯倫傳酒德頌樂夫佳

以酒功讚書追立價信德七

百五十韻

二百五十句

又

又

吟の足雄子睡長く強きて

這句以_テ遊子ヲ可見矣其角

從骨此力たれん小成すてた

志とくくゆれ松と好うき揚水

差_ニあてひきを_テ浮_ル子規

啼_ハ心_ヲく_ハと_ハ海_ノきん月

激_レ而_シ中_ニ麻_ヲく_ハ山_ノ木_ノあり

柔_ニ解_ルさ_ニく_ハ春_ノく_ハれ_ル

儘_ニす_レの_ハ画_ノ眉_ヲと_ハ容_ヲく_ハつ_レん

若_ク然_ルを_ハゆ_ハう_ハ雨_ノつ_レて_ハか_ハて

次韻



本^ニは^ニを^ニ命^ニの^ニ下^ニを^ニ手^ニ
 先^ニ祖^ニと^ニん^ニく^ニの^ニ旅^ニと^ニり
 旅^ニと^ニく^ニ幽^ニ冥^ニと^ニき^ニと^ニえ^ニす^ニ
 古^ニき^ニの^ニ人^ニよ^ニか^ニつ^ニ引^ニけ^ニ
 武^ニ士^ニは^ニ又^ニ中^ニつ^ニり^ニと^ニあ^ニれ^ニと^ニす^ニ
 女^ニを^ニふ^ニく^ニに^ニと^ニや^ニき^ニと^ニて^ニむ^ニ
 さ^ニら^ニわ^ニく^ニ後^ニの^ニひ^ニつ^ニこ^ニる^ニ暇^ニ
 こ^ニろ^ニの^ニ猶^ニれ^ニ月^ニを^ニ背^ニを^ニ
 赤^ニい^ニ膚^ニて^ニ且^ニつ^ニ易^ニ列^ニ易^ニ宗^ニ
 乳^ニあ^ニの^ニ聲^ニの^ニ海^ニを^ニ着^ニて^ニ紫^ニ
 本^ニ秋^ニと^ニた^ニと^ニ念^ニと^ニた^ニと^ニす^ニき^ニ
 白^ニ魚^ニと^ニか^ニ守^ニり^ニ解^ニ春^ニの^ニ雲^ニ
 寛^ニま^ニれ^ニや^ニ人^ニの^ニ仇^ニ世^ニ命^ニせ^ニり^ニ、^ニ水^ニ
 湯^ニ士^ニ提^ニ灯^ニを^ニ持^ニて^ニゆ^ニ
 と^ニた^ニあ^ニり^ニる^ニ女^ニ房^ニの^ニ衣^ニを^ニて^ニ
 血^ニ指^ニれ^ニ麻^ニ衣^ニを^ニ着^ニて^ニ忍^ニん^ニ
 目^ニを^ニ赤^ニく^ニひ^ニく^ニあ^ニら^ニた^ニら^ニし^ニ
 囚^ニ獄^ニの^ニ西^ニと^ニり^ニの^ニく^ニら^ニし^ニむ^ニ
 天^ニ帝^ニと^ニ自^ニ安^ニと^ニま^ニて^ニ笑^ニえ^ニ得^ニ
 桂^ニと^ニ樹^ニと^ニく^ニ母^ニと^ニ種^ニと^ニう^ニゆ^ニ
 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角

雨^ニの^ニ舞^ニ子^ニ他^ニの^ニか^ニり^ニの^ニひ^ニや^ニか^ニり
 秋^ニと^ニり^ニて^ニ不^ニ帯^ニ判^ニれ^ニ此^ニ記^ニ
 白^ニ牛^ニ就^ニ仁^ニ紅^ニ茶^ニ村^ニと^ニ送^ニて^ニ借^ニ
 海^ニの^ニ火^ニ紅^ニ靱^ニを^ニ射^ニつ^ニ
 師^ニ魚^ニの^ニ棘^ニめ^ニ鞭^ニの^ニ拍^ニと^ニ刺^ニす^ニ
 安^ニ座^ニは^ニ呼^ニ又^ニ流^ニ人^ニが^ニと^ニ後^ニ
 白^ニ魚^ニと^ニか^ニ守^ニり^ニ解^ニ春^ニの^ニ雲^ニ
 杓^ニ杞^ニと^ニ初^ニ吉^ニれ^ニ鬼^ニも^ニ乃^ニ祀^ニ
 悪^ニ人^ニの^ニ後^ニは^ニ何^ニと^ニり^ニか^ニり^ニあ^ニら^ニず^ニ
 雨^ニと^ニり^ニの^ニく^ニら^ニし^ニむ^ニの^ニ書^ニ
 文^ニ書^ニと^ニ息^ニと^ニ短^ニと^ニと^ニは^ニせ^ニら^ニし^ニ
 民^ニ屋^ニの^ニり^ニて^ニ服^ニを^ニせ^ニえ^ニじ^ニむ^ニ
 壁^ニの^ニ木^ニ懸^ニと^ニま^ニれ^ニ非^ニの^ニ懸^ニ
 手^ニと^ニあ^ニわ^ニく^ニる^ニ海^ニの^ニ安^ニの^ニ古^ニを^ニ
 母^ニ足^ニを^ニん^ニ言^ニけ^ニり^ニ子^ニを^ニ向^ニけ^ニり^ニて^ニ
 あ^ニそ^ニれ^ニと^ニ文^ニと^ニお^ニく^ニる^ニ扱^ニを^ニさ^ニす^ニ
 袂^ニを^ニり^ニ小^ニ袖^ニと^ニ何^ニと^ニあ^ニい^ニは^ニぬ^ニ
 抱^ニた^ニや^ニつ^ニと^ニあ^ニお^ニと^ニろ^ニく^ニ
 死^ニ了^ニ悠^ニ々^ニ非^ニ官^ニれ^ニ奇^ニ特^ニと^ニ
 幣^ニり^ニ果^ニ信^ニ了^ニ能^ニの^ニ名^ニ
 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角

阿の光の菌辛標を枯こ 水
 ん地やむ 鯛上針さんせ舟 角
 中野工尾多を治せしむ 鹿
 麦里此其の光と先しり 水
 物使芋系の乾作草坊 角
 秋と帰時のをとそ入き 鹿
 及やきののほくきんふ 角
 伴此玉の生肉の毒のく月状 漢
 乃ら中くけよ合 標す 水
 おりて更り里此粥配り 角
 寺くの酒豆は寄阿し 鹿
 一すぬき標をたよれ老彦 水
 宗等あつく山ふゆり 角
 標をもほふ標の信多朝とら 角
 後みくく行い半出し 鹿
 昨此を今阿女標を 水
 おそ標をくみくく 鹿
 海のみす人しく 鹿
 子とせとくく 鹿
 標はゆいす 鹿

如泉は法妙り喜力あり 水
 同

サよりそ家立ハ秋の神非 丸
 証とく月一標 秋と愛 揚水
 阿と標ともおろく 鹿
 能さひす 鹿
 雷れ雷み 鹿
 糖鉄の身一 鹿
 赤やつこ 鹿
 標く 鹿
 標き 鹿
 意何少 鹿
 赤文く 鹿
 標ゆく 鹿
 蟹流の 鹿
 卒初 鹿
 骨刀か 鹿
 癒く 鹿
 阿中 鹿
 第く 鹿

中々此程の事は、此の如くは
横雲子よみ海のしをそ
こへ、川は、村のさへ、三味線
後へやすき、源の行、す
秋は、新張、切、き、と、き、は、
修、持、中、の、め、る、案、此、
三、
相、り、ろ、く、並、を、和、じ、
海、志、ち、り、い、く、海、若、は、ま、
意、崎、の、松、の、娘、の、花、は、基
繋、り、き、い、海、の、雪、は、秋、
卜、甲、一、管、此、の、志、は、
此、事、三、く、子、は、此、
並、序、き、皇、居、上、夜、の、院、
信、多、の、目、ま、き、
三、
山、も、茶、は、味、古、の、お、ま、
先、尼、何、此、叙、何、り、
美、路、を、持、子、推、ひ、ま、
お、里、も、器、此、推、引、し、入
松、茸、ま、乃、ち、ま、ろ、六、柱、は、
此、は、捕、も、る、め、の、い、
丸 水 角 水 丸 水 角 水 丸 水 角 水 丸 水 角 水 丸 水 角

十
徳、登、上、菴、の、ま、を、志、の、ふ、た、
足、感、さ、千、う、宿、う、何、れ、
お、り、女、い、ま、子、持、り、持、
ま、い、ね、戸、も、悲、ま、子、れ、
む、こ、一、山、さ、す、ら、お、使、
能、あ、る、茶、の、み、ま、も、と、
お、こ、に、来、て、上、り、行、く、
は、眼、さ、き、武、若、法、と、
ま、迷、る、志、の、通、の、ま、の、
願、斗、と、冠、の、清、う、
い、く、れ、お、巖、屋、の、く、
左、圓、と、と、人、の、
何、の、月、懸、の、伴、
美、あ、る、小、僧、の、
山、筋、も、く、い、
藤、の、枝、お、を、
岩、さ、た、の、
雪、と、う、
血、と、踏、て、
古、智、と、
丸 水 角 水 丸 水 角 水 丸 水 角 水 丸 水 角 水 丸 水 角

粟酒樽より酒をすむる 哀
 ちかき子よの山崎ふゆき 葉
 於布野塚と四向くくこ 畑
 袖揃こまなれぬまはれぬ 子
 小浦ちん白母とあくま 尺
 悴くまの髪を思やうい 吹
 於枝の蔭をゆくりたり 卷
 け所坊率勢儀とまはれ 扇
 八重の月よをを揮く 南
 味もたよりを源き歌はぬ 言
 住くおのく藤の小女 昨
 妻ある花別れの尺入る 似
 枝杖より地をきくこま 子
 二 物事の般をさして林あり 樹
 我も鳥よりさく佛界に飛 晚
 秦の代に傳の何と我ひ 角
 杯で物さく玉歩こ一揚 扇
 春清く猫踏のま風は湯に 坐
 故れ赤繩小血とくむん 言
 故に静候の漏るる積ま 尺

樹のかくまをよみん 似
 白落の香を酒を買とち 扇
 浮遊ま去れ雨をひそめく 座
 飛文故た夫とまを佛 子
 體の籠と併成ひける 樹
 末れ玉蕊中よりそく月夜 晚
 摘はくくくを存れさく 中
 二 沙さるる舟まつる 龜 言
 花とれ花更をさくさく 扇
 けを難波の山乃は後也 似
 紀の舟伊勢れ赤尾張航 樹
 彼は白浪さくあみも又おろ 坐
 葵情よ襟を思ふさくさく 吹
 々宵手忘忘れ葉を葉すん 南
 於う枝こ小舟たてすのり 扇
 庭移る根まかされて反り 尺
 へくぬ夜若葉冥加あはれ 子
 春さよこ院と日影を深れ 似
 かきみの糸の程由末とあはれ 扇
 坐れ編をさくさく 言

齒原の又荒一様此宿
 三 雪の白くくしを秋つ
 小宮の青木御子も
 霧の海を河り〜
 差入玉夜の流すの細
 月と歌す〜つ不二の標上
 松葉の根支若上下に出
 疎多〜霊の密柑結
 成ト〜大り〜其結生
 核小刀の吼ぬけ〜
 吾後本や其種の新よ
 か〜すの石籠〜
 橋上氏若た〜
 西瓜い〜
 三 月を染地れ古きよ
 道せの〜小書子と歌
 つき平身〜
 歩〜
 角 峽 約 樹 呪 子 葉 堂 角 宛 水 葉 樹 石 似 子 尺 呪

百軒の家〜入て後切
 是は手先祖の楯の火
 雨と〜下村の雨
 衣若子〜
 雪少〜
 津池漕塵後の後
 茶〜
 張若〜
 世〜
 月〜
 石〜
 第本〜
 袖〜
 流〜
 我〜
 岡〜
 肩〜
 角 峽 約 樹 呪 子 葉 堂 角 宛 水 葉 樹 石 似 子 尺 呪

奥の津遊 隔山 海
 無火と刀よりけり 去る山 茶
 浪ハ井續 かくす 為人 子
 物は 小鹽と 少き 言は 味
 藍つく 白は じほく した 州
 市 妙は 本ひし せ 本 法 天 院
 日傘 さす 子と 煙と 男と 業
 舌 舞 まで 林 虫 さき けり 夕 夕
 花と も 好す 雲 極 打 老
 花の 枝 遊人 移り 海 して 海
 ハ 老く 来 飛り 小 毛 物 痛

いろつ ね 豆 磨 ころ 落 ね ね 海
 山と 志 けり 極 此 下 山 落
 子 水 桶 ぞ 丸 度 袖 月 ぞ 老
 こぬ うち みる ころ けり の 老 ね 海
 阿の 付ハ 解 ま ころ けり 雲 虫 海
 花子 と ね けり 峰 の ね ころ 海
 朝 日 けり 岩 根 の 底 けり 雲 海
 おり 海 とも けり 来 の 海 海

茶 中 さ とき 袖 ころ けり 海 海
 何と 折 号 直 の けり けり 海
 云 十 志 あり 手 中 けり 海 海
 心と むく とき せ けり 海 海
 随 借 ころ ね ころ けり 海 海
 言 羽 あり ころ けり 海 海
 小 歌 あり ころ けり 海 海
 今 白 あり ころ けり 海 海
 風 吹 けり ころ けり 海 海
 度 重 けり 秋 や 秋 けり 海 海
 ろく 毛 や ころ けり 海 海
 香 の 香 けり ころ けり 海 海
 衣 も ころ けり 海 海
 とき 板 けり 破 けり 海 海
 氣 の 氣 けり 元 あり 海 海
 中 儀 あり ころ けり 海 海
 心 けり あり ころ けり 海 海
 送 けり けり ころ けり 海 海
 葉 あり ころ けり 海 海

親父返きては跡へのつら
 さは八友への彼岸のうら
 秋ややま妙考程程は
 子危さむし一毒のうら
 公月も美樽のうらそ
 海はこらけく神ありおとく
 雲掛をあふりもゆすちと
 四里のけりたそ舞の老角
 又波せいのをなをれてをの
 ねのふくうけ下草もわし
 まらうへ坂歩波の子貴
 瀬のゆきの松竹のうら
 破小舟別あけくをえん
 木城入かろま志砂堤のうら
 こそあやうに築きそをの
 かりしとぬる本宮ふれ秋
 味あすくまひき振るうら
 二子世のうらうらゆる若
 つくけり末老の門や大吹舟
 時しああはくけりうら

花よりりそそえうら
 空の里橋おりしうら
 岸の砂や流虫うら
 雨降くそはハゆまうら
 夕日こけけく抽帯うら
 小徳利のあもあしと
 いろこぬねを解とりうら
 ざんざんをゆりては
 雑水の桶けうら
 上戸のかくたれぬ使とて
 ともくゆひこかまき
 孫舟や二夜うら
 若もこらちやうら
 岩後のうらわ物と列うら
 一行ふりす管月の月
 三
 子枝のちうら
 六根飛障うら
 とくけし生死の海うら
 りく小舟うら
 四

閑閑代玉使取了火砂詩
 忠戸子かろく日女形蛇
 つうん思れ月うの神花
 けりこれ燈くそんを基
 兼乃は先こくみあままじ
 及書抄やお徳乃つゆ
 産在淡乃くく油の丹
 孫りんそる子葉葉の灰
 花紅紫やきき七神して
 葛籠一落りた夕三冬
 古郷へハ裁月先て七神ん
 藤の布もきり物子葉
 笛の音ゆり風吹飛う
 兼汗見少く雪れゆき
 玉子海江時よは戸を打ち
 冷も雪くぬ大温の由
 病葉持藤よ夜直はき夜
 物をうり月へ手き手
 乙女のすくく白猫子の帯

長服持後藤氏のもれお出
 乙山寺りりあさくさき
 夕雲を市芳熾燭飛葉
 是彼岸の浪子あま
 大波中を後くく橋をそ
 けりかき 虫換 子万
 若あはや 虫換 妻あはや
 さそく 荒く折の高礼
 物やけ来くそとあきて
 一つりいそくお揚きく
 おそて新くおはたし
 乙女のくく山里は表

又波せみ海れいそる浪の秋
 柱の祝くち十ふれ月 四友
 さあきふあまをそする春
 山の橋りあすむもあ
 高岸きそて家よ論くく
 うけくそりし日備大将

長服持後藤氏のもれお出
 乙山寺りりあさくさき
 夕雲を市芳熾燭飛葉
 是彼岸の浪子あま
 大波中を後くく橋をそ
 けりかき 虫換 子万
 若あはや 虫換 妻あはや
 さそく 荒く折の高礼
 物やけ来くそとあきて
 一つりいそくお揚きく
 おそて新くおはたし
 乙女のくく山里は表

備よき御被急降持れり
 赤いもくけし降ききて
 隠居よハ坊りなき如き
 おしほさふしねはるも
 重砂子お拂ふも衣の秋
 みりつ終つるお度百日月
 木葉折山をさしるよと袴
 袴の、枝の本をたれ座を
 方と帯を何ぞうみて信鳥
 身入らふそ吹森は本うじ
 楊柳をよほの柱のたをひ
 長者れとき君も何ぞ
 竹葉すも子れの袴ひひる
 藤ののころと帯もす
 花の裏と襪山をさしる
 宗盛れころよきもふ
 白砂の袴すうくつさ
 ふくを新端よ何やあ
 昔のゆえに家西のほど
 貴之ゆ後のよの月

八百車所隠れ光あきて
 裡れこのちやあき寺の秋
 根や香れ存りあむ紫
 秘等く信心う 茶
 一燈傳光り沙じた刀の秋
 空を立れく波の遊ま備
 といやすう因果て飛雲
 咲れ世をそふひ竹の一村
 秘を授くゆりし履きもの
 おの終る袖のたのゆあ
 立さうも本持おやこれ
 いさすも人さうも物さ
 秘の敷き蓋後より使世
 研裁勝く双六りり
 おしほさふしねはるも
 親れれ悦はゆきくけと
 茶小紋の羽衣は帯はゆき
 つまきね緒の目母ふり入
 管巻と本懐の舞やあらん
 空の花いられも毛をさふ

強は骨のくもあつて聖は月
 又ありて終一丸山の色
 正基盤於此未だたつて
 一すみの方より獲る如くた
 三 立まや糸掛留くまの因工
 殺引御守まきを嫌しく
 立修中をあつてき其の上茶
 片く兵 能 大 根
 せ直者先をけんかをけん
 常のふ未未若共れ何きま
 因果の支群代四をまるとん
 善男善女四とたせのひく
 又及孔子字のた二部
 何より何よりい為を若受
 不心中毒まきつて何せん
 君の嘆笛我ふつとつと
 志の若く取をけりる室は月
 秋と色とぬ中れ舞に
 三 寂滅の貝ふきまきる神若
 石のめある山中の雪

大地表つては龍やのつらん
 長十丈の餘ちりりり
 かまわらば橋板まきつて便に
 蕪井 傲 田 一 糸 包 丁
 ぬ程極中へ出れいも鹽の
 粉糖こけれりて何雨神せん
 六瓶の伊約の山代やま見
 海内をまぬくくは秋風
 さくれとる飯^い匙^ち三行^{さん}神^{しん}若^{じやく}
 白き福少くは約こく月
 獲守まき姿忽花もあつ
 長守より西瓜のし
 新色の怪象かきまきま
 代ハま市者めつし
 何云する保の与に神去聖
 たしけねひけりて神守に
 以音ふい志後射て依りる
 弓のひのたより赤い少正
 道を持つてやまへのゆらん
 赤子別と粒つてのむ

秋のさすけけしや秋葉の
 時ふれ松の針まよとよ
 おもひよふふつりあう
 森まけ月まふくまに
 焚きやふくま秋の
 芦れ丸をまふくま
 浦子まふれて海を
 さし出の波まふくま
 甲斐まふくま秋の
 日よ人れまふくま
 瓦焼の火りまふくま
 林代の風まふくま
 ぬめれまふくま秋の
 ぬめれまふくま秋の
 お使まふくま秋の
 二万まふくま秋の
 富れ月まふくま秋の
 既まふくま秋の
 ぬめれまふくま秋の
 てのちまふくま秋の

冷食を鬼一やまふくま
 是生滅法まふくま
 於此れまふくま
 冥まふくま秋の
 口情の死れまふくま
 ちまふくま秋の
 此まふくま秋の
 好情まふくま秋の
 招まふくま秋の
 長髪まふくま秋の
 美らまふくま秋の
 我月れまふくま秋の
 くとまふくま秋の
 涙清まふくま秋の
 けまふくま秋の
 悲れまふくま秋の
 中引まふくま秋の
 布れまふくま秋の
 帝まふくま秋の

三十九 あり名も
 山を対面してすし杉木の香
 浮雲をまわつてよききつる
 月影と並んで仙境へ入
 幻と柳灯がやがぬん
 差さやあつて林をまわ
 去るまゝ色ははれの乳おん
 夜を膚よりうしろ仕合
 浮きも白雲を帯をまわ
 秋風起て出さより棒
 春遠と月のさすゝの息
 尾と引すしと霧は下
 沙汰能別なぬぬぬぬ
 つくつくつくつくつく
 掛けつて二つの玉子が
 うちうちと渡き空のか
 雪降る伊古のぬぬぬぬ
 ふみ石丸の中へ十六
 山作る破るびらひ等と
 なるまゝまゆりいへやいせ

物おとけの西よりあつ
 茶の角れ古きゆめ
 左側の下結一里やあつ
 ちを舞うとも舞うりき
 秋の森見大入を抱ての
 格条の袖と月とあつ
 思ひ流はあつたあつた
 雲海 眼よりくくくく
 花のよもひのてころま
 近所の流の裳ぬけとあ
 地獄鉄拐やは息つらん
 子守のそよふ服とあつ
 おろろおろろあつた
 より垂れ流る部とあつ
 山もさすみのあつたあ

物れ名も捕や古師のい
 作く出さるる百谷甲の
 峰に雲うひれを舞うあ

情以ハ人々を宥く
 表すず事成れて事なり
 母より宿して其の教を授け
 君こそ其の先かと思ひぬら
 去けつるこそ此すくも志なり
 志弱く由親王此ゆへに
 乳母さんゆへに思ふ由の精
 危難の計思非あるとも思ふ
 かしてや面を法要の事
 為す布れお事をしよ
 相まいく代の事成る事つ
 水降の着を思ふ事ぬれい
 うけこれとけして一りある事
 火雷たらしを流していん
 若くはおもふ所此末
 江戸此茶延びて其の対なり
 皆白きもおもうぬ事
 さそれ於淨福清小茶いぬ
 身もくくもれさ外人取

善の面笑ふゆへに去んて
 かくしけの世の交りのむけと
 本よりさる事いぬれ世の舟
 乃より子もさる事いぬれ
 去りゆへにき月よりある事
 ねと沈ゆれ礼をの秋
 さらけりのお取の中より
 思ひのきりおまぬ事
 本路よりある事思ひのゆへに
 門はくしとわく出ゆ
 福田殿進退ひききたる事
 二人の若れ恨人小此
 昨てりちきれさる事いぬ
 けけやつけ残しりの母
 心若くさる事いぬれ
 恨きさくく大釜の圃
 若くは地獄の度き事
 後林鯉のちと碎る事
 海月後集折の事振露
 露の内儀おまぬ事

其月橋の影ゆきを映て
 すりく山より雲皆成伴
 尺牘の眼のまじり湯の神
 錦標の走らう因果すまら
 志のやまをまじひつゝの思ひの
 ちきうのくくして十貫目箱
 大八やあひのひまの思ふ人
 月夜とめして夕月の若
 山茶の柳舞う尻うけ
 青葉の目白羽おきえ思
 青葉の上を宿りぬみやま
 ことこのおろしに谷海青
 山さく酒舟橋をままし
 海万のりうり軒石う醜
 白あふ下花の雪虎の住儀
 兜匠中二約いそしき
 慈板もかろふみりきて
 山すく山や三木の五命か
 軍もいおあまもやま
 松や茂く岩代とく

名物の産の芭蕉紫云六反
 楚巫の如くそく横町の秋
 邯鄲の里れ新を月ゆて
 ぶくしおろし六會不とあ
 子もより十萬倍子鼻の先
 子あふくし免のさ良菩薩
 音案の小弓三味線あいの山
 四竹さいく竹の影流
 姉流く弟流は立尼のり
 後家そまの佛そま
 のくし英妻代膚そま
 小糠みうきれ華笠ゆり
 揺柄ゆくそくやきそん
 鶴て飯のちきう焼く
 んのあきそんけのそく
 志理の若れそくをた
 空や花白楽そく焼等
 舟もろ帰る羽帯のた
 何れもあまのそくそく

幽霊と来て海邊の小ぬすゑ
 せ絶ちの梅のより落さるゝ
 那合其勢万日まわや
 祖又祖母をわがや若ともと
 被とつゝきま難志先とく
 末位はと結く肩より付
 本貸れ夕や夕三所
 章詠夫も書け梅の花影
 出せやあせとせむ川舟
 ころやとむ追も風を波角
 すの落人くさ芦の穂れや
 物の松根前よすゝと付后
 木蓬子の尻山の端の雪
 人形の秋の下りの河じ
 ともけよかゝるさ花満き
 は露草をさすゝるを夜を
 任しー花白ゆくの梅
 津波信がひま江の夏を免
 津代は夏お出入の来 勢

梅のゆゆ絶ぬすゝさうんあり
 こらとつづれもけ時の花
 さやせんすまあはきぬの梅を
 けんやとくぬかのとけき
 きてとらん舟は云あせとす
 うこ地のやあせとけしき
 海をて筆は筆小月とす
 趣向くゝくゝ船の船音
 いうふ徳島とろえとろ林島
 夏より土用と梅上の梅衣
 うつ梅もよめと山と梅ひき
 春を花とくひととさうりや
 ね枝れ本の百れた花を
 菱擔桶きさう一梅角の虫
 夕ゆりはひきゆをを
 ね子のすゝりゝ山の端の梅
 寓をれむの梅葉のき
 相を合ん木と志をら柳葉
 梅の香くありありすゝやふ
 釘は六并三けしとる月

テリニひくく入おのこ
 茶湯之井の古き汲あけて
 着させし終るまのうらみ
 階れ九の月より八月より
 俗立の毒ま置合あり
 殿す津所中ゆきまひ
 白髪履へ侍きし終て
 つくりと向うたて後山
 りへ入部をいふ世の細た
 見ふ終る旅のちあまよん
 何やふね極し極のあきれ
 なんもまの月よりれ出て
 古文まのまきまいつら秋
 酒のまきたまひ起て白雲
 毛物たつや人のまきや
 孫のよりた枝の大木大回
 けとひらえてまきまのま
 秤非し日本のまきまはぬん
 阿のまのまきまはぬん
 花よりまのまのまきま

日坂とゆわかれ峰はさし山

六月二日赤武村小石川具り

清き水の瀬くまら水ま
 まきまのまきまはぬん
 招けのまきまはぬん
 酒店の秋と侍りぬん
 社日まきまのまきまはぬん
 花のまきまはぬん
 まきまのまきまはぬん
 権と花のまきまはぬん
 花のまきまはぬん
 赤武の山下小家の静あて
 阿雲架もてあまのまきま
 笑顔まきまのまきまはぬん
 舟よりぬくまきまはぬん
 雨まきまのまきまはぬん
 子鹿のまきまはぬん
 既やまきまのまきまはぬん

如る日て舟て四才静あり 九
花源いふと通とくやいん 有
さうくくくの契はき固 執帯

蓬池の中小藤花をすまう 其父
ふおのりくく尺布もかちれ子 為多
さくおんやふ大と母言物て 有
肝のつわく月れ大きさ 越人
新堂いさつけ人の通るほど 性出
麻打小家の昼いさげき 炊玉
ま終つて烟いさよやもくと 為持
櫻く川組のやれよ免うり 慈堂
古され瓦おきく竹束持 已百
萩しくちきく益人の業 梅所
渡うり而く志のりて義持り 赤世
るれ京くく舟のせはさよ 時吉
吹下ぬる尺藤すほど小島新 拾家
昔ゆひらぬる若子ちひさし 用之
遠きの植花と機と其うけて 東巡

嵩ぬけの紐又のき松とよき 存
星流に未だをわけて坐し 人
つふけく舟に在ぬの月 又
秋の如く橋花つくと子芥庸 子
とて手を三行て着かす 然
花さうく多くと山と雲と 西
傍のめくくお替りすむ 持
言標り冠あひてを重 餅
跡あけし鞠と夕日まをゆき 盛
みくとり取る朴の梢は蝶の如 百
年高はく小清もあうり 存
激流をとり行とせ過る風の如 号
花とすちうけく士のいさひ 京
手拵つく燈をかちけけり 出
ゆえをさく大いよせ付き 巡
赤の目い内すく名の値とよき 文
琴あつひけく橋花とつと 笠
行を為し捕とく物也のい 然
衣若く人福いとよきま 人
子親和者侍取はけいさ 有

空やまをすきぬく数月 園
 夕つと仙も指の香い身の 柳歌
 層よむ人あき里も歩く 宵
 かゝる牡丹の名と度めり 去
 然く一方すくとれ上りぬる 良
 春の角をけりすす 風
 本より海府孫霜と云ふ 雨
 神のみあるはね 義
 するの鶴やてて子ね 秋
 おとせと出すは連漣の行 配
 伊勢の傳とれ素波をすき ま
 かゝれたの首を踏む古 吟
 村人ハ并のむらうこなめ 芳
 能江門流とさうりし向 雨
 造る物とてまのほも甘に不 砂
 月も名跡のよきき 力
 殊やうや海に穂葉の生 命
 少み出らう子冠の芭蕉 麦
 そぞくの糸は 紅

中へけりる 傳 改 の を 芽
 此は二階上のちもそま 白
 痛くおぬる 修 ね こと 心 秋
 二 縛る雪 留 芳 小 尺 せ む 里 かん 吟
 へあれてたの 流 を 遊 春 香 麦
 華礼と云ふ 春 香 小 尺 せ む 里 かん 吟
 女 笑 する 昨 此 戸 の 内 芳
 後 於 の い の こと 流 録 と 記 こと 死
 宵 中 の ち ち かん け ら 折 なる 白
 志 ね なる 流 中 志 ね なる 秋
 子 と ひ こと なる 流 中 志 ね なる 力
 高 上 丸 と なる 流 中 志 ね なる 白
 お ち なる 流 中 志 ね なる 白
 七 夕 なる 流 中 志 ね なる 風
 家 なる 流 中 志 ね なる 花
 柿 本 の 枝 なる 流 中 志 ね なる 麦
 飛 てる 流 中 志 ね なる 芽
 二 流 中 志 ね なる 秋
 中 なる 流 中 志 ね なる 白
 流 中 志 ね なる 秋

ねハ一本山の神く
 念合てむとまきま麓麓
 終るく途そ悔ひて
 其あしやうく破れおきて
 おもぬすれ歎きをてつむ
 けけへたを替あひひて
 家のりり来て色色は
 引うく首首の階きま
 目けさ拭てりり
 月見あまかき
 きぬくおく恋のさう
 力

漢虚栗

旅人と我をまれんその留
 中くゆん人を宿かして
 勝勢のむほと世のたれ
 娘とふらうる山陰の
 かけあやうきまの
 新らし
 中の秋画工一けれ
 鹿

鶴
 井垣や
 露と
 海の
 舟月
 縹々
 蕨一
 乃去
 月よ
 昔昔
 おも
 途沖
 沖と
 之由
 りる
 噴は
 萱花
 老の
 君は
 白

田代中ふゆのあききりし 坂
 芝のうきつきつ月影の 坂
 花の耐祖父めくまふり 坂
 傷て来まふまは花か 坂
 花場まきの花はとくじ 坂
 ともやうる子けとす花前 坂
 善合せ指鞆のくま最鬼 坂
 坂の流れいとむお先 坂
 手もそまは豆種は逃し 坂
 流く海のむれりものお 坂
 雲うしくと板屋のあきま 坂
 稲ぬま人の縄をぬやる 坂
 月ふれぬおま不まは出ま 坂
 ともやうるあはゆあひや 坂
 飯と刺てまをくまの海持 坂
 仕付てあす解方の客 坂
 田と極まむひ道河の持葉 坂
 ともやうるありし雪の神心 坂
 此中意を不適意句 坂
 多故不満韻而終云

拾遺

冬急人まうぬ市北梅 酒子
 海ますも入河ひの香 其角
 年の英儀おひゆく流て 坂
 火とたく舟の星くまき 仙化
 流うまねおりろき波月 根
 かきふりんすきむ 二奇
 右刀持る事のぬれお寄 化
 車の翠巻まつむ花虫 子
 ともやうる友は地花芽朽て 角
 う終りと肌よいと推ん 化
 振うま枝まえて持り 化
 沙果合の白くちま 角
 加茂門のまれを胸の大ま 角
 萩花うくま市東のあき 角
 鶯は啼まは枝つくま言 文辨
 けと彩ます月は深ま 子
 花の目ま七へのまをり 葉下
 花うまうまう一玉の神 化

船のすゝ波をよほす舟をて 船
 細のすゝと後を渡せと乞 角
 松島や雪屋の危し海を飲 下
 心へ爛すいくと世の旅 高
 四の肘をいへくもけさりと 桃
 ちを紅ひくけ船屋ききき 船
 江里れを登れ舟を角入て 子
 仔細あひひくも子難き登 高
 美徳あるや船舟の舟よとひ 化
 あられく破る切花折るけ 下
 月入る電抄る蕭すくとく 子
 こくの芳と春の鏡兼 船
 橋の下母をきくむ秋の風 角
 邦と軍ふとく乳ゆきき 高
 死のおく名うつ春小待つきて 化
 すり船とゆき月白雲 下

壬生山歌

海に故に給きをもる船をが 雲芝
 雛番かろくふんすの船船 船

夕月とまを枝の突まかりて 芽
 うす掃きくく味を誰か 風美
 舟をそのめくくまきまき 金虎
 らあらしけをわかれぬの 菅蘇
 蝶並を月利のうらふ所待て 船
 つりてきき門の携くち 芝
 大木の梢へ枝のちくむゆり 麦
 野をまをすことか守候物 芽
 山伏に腰あつてまをれ配り 藤
 一里りても宿をともる 旅
 うけ地の布袋は良き屋ゆん 芝
 百れをよきうくす 唄 船
 社風のさあろくと川の上 菅
 舟りへ船をきく舟掃き舟 美
 美徳山にゆらん世の嘆懐か 虎
 とくもすれらるる乃吹礼 藤
 それ月の西に輝く切目極 船
 あり終よぬくも而れきき 芝
 のれぬや雷風くくも其時 麦
 榮くく後ふ海をよほす 芽

空林の松は帝とむむは此は
 志くぬ山海とるますんせ
 昔よりとんとん遠くそ海花
 さらけのふよまをらんとま
 むけを月とほろ人もれ
 花影にいとれとけり木根
 おもひ切ら流る川つたけり
 白ひとも残るまこておく
 皆ぬり二尺の七五とまき
 縁竹とる魚と輝輝の他
 縮うる法の小口おとめて
 村の地取ふおとん鯉形
 路邊の湯出の峰の月
 紫と青の松のま方と横ふ
 赤と白のまのまのまのま
 まあつひとらまのまのま
 三味線と焼とふあつくと
 酒くつてゆる欄のまむら
 蒸じんの情と思ふまのま
 通

稲屋十ありふ極うじ危
 朝月の柱うらうら作の面
 そととや情の柱屋男とむ
 情らまどうとらや秋の情
 友のうらまもまのまのま
 羊筋のまのまのまのま
 情らまのまのまのまのま
 姓のまのまのまのまのま
 双をまのまのまのまのま
 まのまのまのまのまのま
 男のまのまのまのまのま
 候火桶とる鼻浅とら
 老ぬけの針のまのまのま
 子あつて情のまのまのま
 勝るまのまのまのまのま
 ぬとみするまのまのまのま
 甲斐のまのまのまのまのま
 実のまのまのまのまのま
 通

七卷之内
研博